鮮やかな夏の初体験⑩～たまには真面目に勉強しなきゃ！　静謐な図書館編～
【体験版】

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

※本体験版は本編の一部を抜粋したものです。

翌日。

　俺は早めに図書館に着いていた。朝起きてからソワソワが止まらず、落ち着かなかったのだ。

　里桜はまだ来ていない。鞄から文庫本を取り出し、ページを開いてみるが、文字が頭に入ってこない。俺は読書好きで、本来なら図書館は好きな場所だ。だが今は違う。勉強の合間の休憩時間を、どう埋めたらいいのか。悩みに悩んだ末に出てきた答えは「お喋り」だったが、大抵のことはもう話し尽くしている気がした。

　う～ん、と唸っていると、ガラス扉の向こうに彼女の姿が見えた。自転車置き場に自転車を置き、軽く息を整えてから、俺の元へやってくる。

「おはよう。孝史早いねぇ」

「まぁね」

　理由は言わない。

「また、本読んでる。ほんと本好きだよね」

「そりゃあね」

「図書館も好きだし。昔思い出すよね。時々、一緒に勉強して、休憩は孝史のオススメ本を熱く語ってくれたっけ」

「そうだったね」

　読書の話題になると熱くなってしまうのは、悪い癖だ。

「今日は……あれはしないだろうし。本について、ご教授願おうかな？」

里桜がクスクスと小さく笑う。

やっぱり、今日はエッチなことはなしだ……。

俺は、静かに肩を落とした。

「どうしたの、孝史？」

里桜が首を傾げてこちらを見上げる。朝の陽射しがガラス扉越しに差し込み、彼女の長い黒髪の端を淡く金色に染めていた。

「ううん、何でもないよ。もうすぐ開館の時間だよ。扉の前で待とう」

「うん！」

明るい返事とともに、俺たちは図書館の入口へと歩を進めた。

中に入ると、そこには当然のように本がずらりと並んでいる。書架が作り出す静謐な空間。クーラーはほどよく効いているはずだったが――。

「やっぱり、図書館ってクーラーの効き悪いね」

里桜が小さな声で愚痴を零す。額には、自転車で来たせいだろう、薄い汗が浮かんでいた。

「里桜がさっきまで、自転車で来ていたからだよ」

「そうだけど……ここって昔からじゃない？」

そう。この田舎の小さな図書館は、夏場になると妙に暑さが残る。もしこれが理由で図書館勉強を諦めてくれたら都合がいいのだが、そんな都合の良い展開は起きそうにない。

「じゃ、とりあえず座ろう」

率先して席を選ぶのは、里桜の方だった。彼女が腰を下ろした隣に、俺も自然と座る。お互い教科書とノートを広げると、彼女がいつもの調子で言った。

「さて、やりますか。孝史、いつものアラームお願いね」

「うん、わかった」

朝一番に入ったせいで、館内にいるのは司書の女性が二人だけ。田舎の小さな図書館ゆえに蔵書量は少ないが、勉強スペースは意外と整っている。本の種類が少ないのは俺には不満だが、今日は勉強のために来たのだから仕方ない。

俺は意識を切り替え、文字に視線を落とした。

――一時間半後。

アラームが静かに振動する。

「うー、よし！休憩」

里桜が椅子の背にもたれ、大きく背伸びをした。薄いシャツの下で、胸の膨らみがわずかに持ち上がる。俺も長いため息を吐いた。勉強の疲れもある。だがそれ以上に、いつもの「流れ」がないことへの欠落感が、胸の奥にじわりと広がっていた。

……俺はどれだけセックス好きなんだよ。

いや、性欲の高いお年頃なんだから仕方ないだろう、と自分に言い訳する。そんな内面を巡らせていると、里桜がぽつりと提案した。

「孝史。前みたいに、本巡りしようよ」

「うん、いいよ」

幼少の頃から通い詰めたこの図書館で、休憩時間といえば決まってこれだった。俺は本の虫で、ここに並ぶ本の大半をすでに読み尽くしている。席を立つと、彼女は娯楽本の棚へと向かう。俺も自然と後に続いた。

「ふぅん……。昔とあんまり変わってないね」

「そりゃ、ね。田舎の図書館だから、種類は少ないよ」

「ふぅ〜ん……」

里桜が指で一冊を指し示す。

「孝史、あの本ってどんな本？」

　俺が題名を確認して手を伸ばした瞬間、指先が彼女の手に触れた。

「あっ」

　小さな声が漏れる。

「ごめん」

　どこか変な場所に当たったのか。だが彼女の慌てふためく様子に、僅かな違和感が残った。

「いやいや、なんでもないよ。つい声が出ちゃっただけ」

　俺は説明を始めようと本を手に取る。すると、里桜が自分の肩を、俺の肩にそっと寄せてきた。昔はこんなに密着していなかった気がする。体の関係を持ってからの距離の変化だろうか。解説を続けているうちに、彼女の頭が自然と俺の肩に乗った。柔らかい髪の感触と、微かなシャンプーの匂い。

「ねぇ、孝史」

　小さな、甘い声。

「ここだったら、誰にも見えないよね？」

　本の内容を思い出そうとしていた俺は、空返事をしてしまった。

「うん」

　次の瞬間――。

――体験版はここまでです。続きは製品版でお楽しみください。